

# 女子大学生の健康観と被服行動との関連についての探索的研究

(2010 年 10 月 30 日受付 ; 2011 年 2 月 19 日受理)

杉田 秀二郎・野口 京子

文化女子大学

## Exploratory Study on a Relationship Between Views of Health and Clothing Behavior of Female University Students

Shujiro SUGITA and Kyoko NOGUCHI

*Bunka Women's University, Tokyo, Japan*

### Abstract

The aim of this study was to examine the relationship between views of health and clothing behavior of female university students. The questionnaire was constructed of "Health-View Questionnaire", "Clothing Behavior Scale", and some questions about clothing. The questionnaire was administered to 127 female university students. As for the sub scales, the score of psychology and culture major was significantly higher than fashion science, art and design majors in "Harmony with another person" and "Personal and social prevention" of Health-View Questionnaire. The high score group of Health-View Questionnaire was significantly higher than low score group in "appropriateness for social situations" as the sub scales of Clothing Behavior Scale.

In conclusion, the high score group of Health-View Questionnaire, that is the group who defines health as broad and diverse, made point of "appropriateness for social situations" in clothing behavior. The possibility of their regulation on their mental health and social aspect including human relations by clothing behavior was suggested.

(Received October 30, 2010; Accepted February 19, 2011)

**Key words:** *views of health, clothing behavior, mental health, appropriateness for social situations, female university students*

(Journal of the Japan Research Association for Textile End-Uses, Vol.52, pp.100-106, 2011)

## 要 旨

健康観と被服行動との関連を検討することを目的として、女子大学生を対象に健康観調査票と被服行動尺度を実施し、127名から回答を得た。まず女子大学生を専攻別に服装系、造形系、心理・文化系の3群に分け、健康観および被服行動を比較した結果、健康観の下位尺度の「他人との調和」と「個人的・社会的な予防」で心理・文化系が高かった。また被服行動では流行性因子は服装系が高く、適切性因子では心理・文化系が高かった。さらに健康観尺度値の高低によって2群に分け、健康観と被服行動との関連を検討した。その結果、健康観全体では適切性因子において高群のほうが有意に高かった。以上の結果から、専攻によって被服行動が異なるということと、健康観の尺度値が高い、すなわち健康を多様にとらえている者は被服行動において社会での適切性を重視しており、それによって自身の健康の精神的側面や社会的側面（人間関係など）を調節している可能性が示唆された。

キーワード：健康観、被服行動、精神的健康、社会的な適切性、女子大学生

## 1. 目 的

被服の社会・心理的機能には、自己の確認・強化・変容機能、情報伝達機能、社会的相互作用の促進・抑制機能があるとされている（Kaiser, 1985<sup>1)</sup>；神山, 1998<sup>2)</sup>）。その中で自己の確認・強化・変容機能は、ボディイメージ（身体像）や、ボディイメージを含むセルフイメージ（自己像）と関連がある。したがって、自身のボディイメージやセルフイメージをどのようにとらえているかによって、自己（主に身体）を強調するように装ったり、逆にカモフラージュするように装ったりということが生じる。尾田・橋本・柏尾・土肥（2003）<sup>3)</sup>は、おしゃれと心理的健康（対他者に対する自己イメージを含む）との関連を検討しており、このように装いは自己（自己像）を通して心理的健康と関連していると考えられる。

また被服と心理的健康との関連については、化粧による情動の活性化の効果として知られている通りであるが、同じように高齢者を中心としたファッションショー（上野・箱井・小林, 2001）<sup>4)</sup>が行われていたり、高齢女性へのファッションコーディネート働きかけによるリハビリ効果（山岸, 1999）<sup>5)</sup>が検討されたりしている。また、高齢者の着装感情や服装関心度と健康状態との関連を探ることで、装いセラピーあるいはファッションセラピーの可能性を検討している研究もある（泉, 2002）<sup>6)</sup>。さらに、被服行動が健康の維持・増進に関する有益な指標となる可能性も示唆されている（箱井・柏尾, 2010）<sup>7)</sup>。

一方、神山（2003）<sup>8)</sup>は消費という観点から、実用消費では身体的健康の維持・促進に重点が置かれ、快楽消費では精神的健康の維持・促進に重点が置かれるであろうと述べ、被服が精神的健康

に貢献していると指摘している。

なお日本繊維製品消費科学会における年次大会の研究発表の分類でも、「心理・ファッション・色彩」部門のキーワードの一つに「健康」が挙げられており、以上から、装いと健康との関連、すなわち装いにおける自己の確認・強化・変容機能と健康との関連が推測される。

ただし健康には身体や精神、社会などの側面があるため、健康のどの側面に主に焦点を当てるかによって、被服の機能との関連性も異なってくると考えられる。例えば、健康の身体的側面では衣服の生理的機能が、健康の精神的側面では自我の安定や情動の活性化が、健康の社会的側面（人間関係を含む）では被服の対人行動における役割が関連すると考えられる。（心理的健康と精神的健康の違いであるが、明確な差異は定義されていない。ただし、被服心理分野では「心理的機能」というように被服そのものや社会と人間との相互作用という観点から心理的健康という語が多用され、健康分野ではWHOによる健康の定義の定訳が周知されていることや心そのものの健全さという観点から精神的健康という語が多用される傾向にあると考えられる。そのため本論文では、心理的健康を含む幅広いものとして精神的健康という語をとらえることとする。）

また被服と健康との関連を検討した研究を概観してみると、目的あるいは影響を受ける対象としての健康（健康状態）を取り上げているものが主で、影響を与える要因としての健康を取り上げているものは少ない。後者には主観的・内面的な健康観、健康態度、健康意識などが含まれ、これらは観察できる健康行動や健康習慣を通して、客観的に把握可能な健康状態に影響を与えると考えら

れている。

また研究対象として健康を考えた場合に、それが健康意識なのか健康行動なのか健康状態なのかによっても、当然被服の機能との関連性も異なってくるが、本研究では観察できる行動に影響を与える要因として主観的な健康観を取り上げる。

本論文では、健康観を「健康という事象そのものに関する認識の枠組みおよび価値づけ」(杉田, 1999)<sup>9)</sup>と定義する。なお健康観に関連した概念として、健康感や健康度自己評価、健康意識などがある。健康感とは自身の健康状態の主観的な評価であるが、主観的であるという点では健康観と健康感は共通しているものの、健康観が自身の状態の評価ではない点、健康の定義および価値づけを含むという点で区別可能である(杉田, 1999)<sup>9)</sup>。また健康意識は健康観や健康感を含む幅広い概念と考えられるため、ここでは健康観と区別して扱う。

ところで青少年では健康上の問題を抱えることが少ないことから、一般に健康への関心が低いと考えられる。特に女子では装うことへの意識が高くなり、結果的に健康よりも装いを重視する傾向があると考えられる。そのため不適切なダイエットによって健康の身体的側面が損なわれたり、客観的な数値(例えばBMI)とは別に理想と実際のボディイメージとの差異に悩んだり、場合によっては摂食障害によって心身の健康が損なわれたりするなど、被服や装うことへの関心が過度になる(反対に健康への関心がより薄くなる)ことによって健康問題を生じさせることもある。摂食障害傾向と被服行動との関連については例えば箱井(2001)<sup>10)</sup>の研究があるが、若年女性においては被服はボディイメージや身体観を通して健康と関連すると考えられる(逆に、健康観は身体観を通して被服と関連すると考えられる)。また女子大学生の健康への関心は、健康全般というより痩せ願望や減量のような側面に関連している(水村・橋本, 2002)<sup>11)</sup>という指摘もある。

以上から、本研究では健康への関心は限られているが被服に関心が高いと思われる女子大学生の健康観と被服行動を調べ、探索的に専攻別の比較をすることを第1の目的とした。次に、健康観ということでは服装観や被服関心度との関連が当然予想される。しかし、両者とも主観的なものであり、仮に関連が認められたとしてもそれがどのような行動に反映されるかはわかりにくい。そのため一方は行動とした。なお本研究は探索的研究で

あり、明確な因果関係を想定した仮説を設定することは難しい。ただし、健康観に含まれる認識の枠組みや価値づけは行動の準備要因としてとらえることができることから、健康観と被服行動との関連を探ることを第2の目的とし、健康観によって被服行動が異なるのではないかという仮説を設定した。

## 2. 方 法

### 2-1 対象

健康への関心は限られているが被服に関心の高い若年女性として、女子大学生を対象とした。大学生は所属する学部・学科により、被服の製作および文化を学ぶ服装系、生活に関連したデザインやインテリアを学ぶ造形系、心理学や国際文化を学ぶ心理・文化系の3専攻に分類することができる。

### 2-2 手続き

2010年1月から5月にかけて、大学の複数の授業の履修者に対し、集団法で実施した。対象者(履修登録者)は184名で、うち実際に授業に出席した学生の回収数は127名(履修登録者に対する回収率69.0%)、学年の内訳は1年生64名、2年生24名、3年生27名、4年生12名で、すべて女性であった。また平均年齢は20.0歳(*SD*1.50)であった。なおすべての対象者に対して口頭で調査の趣旨を説明し、同意を得た。

### 2-3 調査票

**健康観調査票**(杉田, 1999)<sup>9)</sup> 前述のように健康観を「健康という事象そのものに関する認識の枠組みおよび価値づけ」ととらえるもので、55項目5段階の評定尺度である。尺度値が高いほど健康の定義や健康に関連した心身の機能を重視し、身体と精神、健康と病気を一元的にとらえている幅広い健康観であるにとらえるものである。本尺度は、因子分析(主因子法、バリマックス回転)により、「他人との調和」「個人的・社会的な予防」「健康の諸価値と心身の機能」「健康維持の心構え」「健康の基盤としての環境」の5下位尺度が設定されている。

**被服行動尺度**(永野, 1994)<sup>12)</sup> 被服行動尺度は、個人が示す恒常的な被服行動の傾向を測定するもので、「全くあてはまらない」を1点、「非常によくあてはまる」を7点とする7段階の評定尺度である。20項目からなり、流行性・機能性・適切性・経済性の4下位尺度に分けられる。本来は各尺度値を合計して得点を算出するが、本研究で

は評定尺度の数値の意味（「非常によくあてはまる」や「全くあてはまらない」など）を直感的に把握しやすくするため、平均値を算出した。

その他、被服行動に関連して、被服（化粧やヘアメイク、装飾を含む）への関心の程度（5段階の評定尺度）、被服選択時の色選択の基準として嗜好色を選ぶか自身に似合う色を選ぶか（いずれかを選択させる2件法）、被服選択時の決定要因としてデザインや色を優先するのか着心地や機能性を優先するのか（いずれかを選択させる2件法）、同じく被服選択時に気に入った服に自分の体型を合わせようとするのか自分の体型に合う服を選ぶのか（いずれかを選択させる2件法）、を問うた。

分析には SPSS10.0J を用いた。

### 3. 結果および考察

学年によって健康観および被服行動が異なるか否かを分散分析によって検討したところ、統計的有意差は見られなかった。

#### 3-1 専攻による健康観の差異

専攻別では、大学生の所属する学部・学科によって服装系、造形系、心理・文化系の3群に分けた（各53名、31名、43名）。

この3専攻によって健康観が異なるか否かを分散分析によって検討したところ、健康観全体では有意差はなかったが、「他人との調和」因子においては評定値が高い順に心理・文化系 4.4、服装系 4.20、造形系 4.19 となり、主効果が有意であった（ $F(2, 124)=3.537, p<.05$ ）。そこで多重比較（Bonferroni の方法、以下、同）を行ったところ、心理・文化系と服装系との間に有意傾向（ $p<.10$ ）が見られた。「他人との調和」因子には文字通り人間関係が含まれており、心理・文化系は人間関係やコミュニケーションを重視しているためではないかと考えられる。

また健康観の下位尺度である「個人的・社会的な予防」因子では評定値が高い順に心理・文化系 4.2、服装系 4.1、造形系 3.7 となり、主効果が有意であった（ $F(2, 124)=6.860, p<.01$ ）。そこで多重比較を行ったところ、心理・文化系と造形系との間（ $p<.01$ ）、および服装系と造形系との間（ $p<.05$ ）に有意差が見られた。「個人的・社会的な予防」因子には身体的・心理的な予防の項目が含まれており、人間を対象とする専攻（心理・文化系）と、人間の身体の延長ととらえられる被服を対象とする専攻（服装系）と、いわゆるものづくりをする専攻（造形系）の違いが反映されたの

ではないかと考えられる。

#### 3-2 専攻による被服行動の差異

次に、専攻によって被服行動が異なるか否かを分散分析によって検討したところ（Fig. 1）、流行性因子においては、評定値が高い順に服装系 4.4、心理・文化系 4.0、造形系 3.5 で、主効果が有意であった（ $F(2, 123)=4.209, p<.05$ ）。そこで多重比較を行った結果、服装系と造形系との間に有意差が認められた（ $p<.05$ ）。適切性因子においては、評定値が高い順に心理・文化系 5.4、造形系 5.1、服装系 5.0 で、主効果が有意であった（ $F(2, 123)=3.068, p<.05$ ）。そこで多重比較をした結果、心理・文化系と服装系との間に有意差が認められた（ $p<.05$ ）。なお機能性因子および経済性因子においては、有意差は認められなかった。

考察であるが、被服行動の流行性因子において服装系と造形系との間では服装系が有意に高く、造形系での平均値は中間の4（どちらともいえない）を下回った。服装系の学生はもともと被服への関心が高いという個人内要因と、授業等で現在の被服の動向に触れる機会が多いであろうという環境的な要因から、流行性因子で高くなったと考えられる。一方、造形系の学生は被服の流行には関心が少ないということになるが、ものづくりの意識と被服の流行への敏感性には関連性が少ないためではないかと考えられる。

同じく適切性因子においては、服装系に対して心理・文化系が有意に高かった。永野（1994）<sup>11)</sup>の調査結果（一般の女子大学生）を平均値に直すと 5.34 となり、心理・文化系の 5.4 に近い。このことから、数値そのものを見ると服装系の学生も適切性を考えていないわけではないが、適切性よ

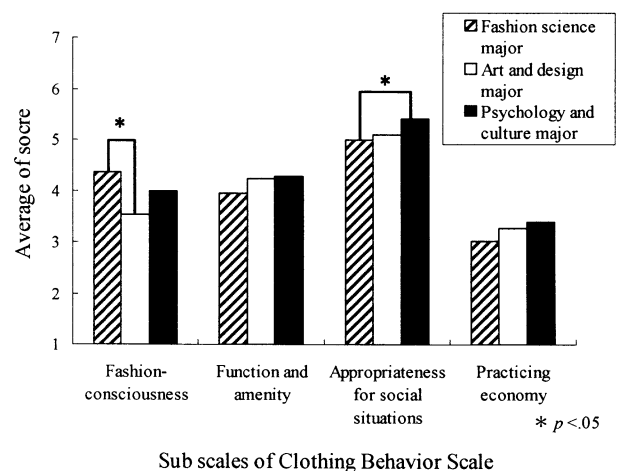


Fig. 1 Comparison of clothing behavior among 3 majors as views of health

りは流行性を重視していると考えることができる。これは、被服を社会的な関係を円滑にするための手段としてとらえているか、それとも自己の確認や強化のためにとらえているかという意識の違いにより生じた結果ではないかと考えられる。

### 3-3 健康観と被服行動との関連

健康観によって被服行動が異なるか否かを検討するために、健康観調査票（1999）<sup>9)</sup>の尺度値の平均値を基準にして高群・低群に分け、被服行動の4因子ごとにその得点を  $t$  検定によって比較した。

その結果、まず健康観全体の尺度値では、被服行動の「適切性」因子において高群（ $n=67$ ）が 5.4、低群（ $n=59$ ）が 4.9 であり、有意差が見られた（ $t(121.574)=-3.412, p<.01$ ）。（Fig.2）

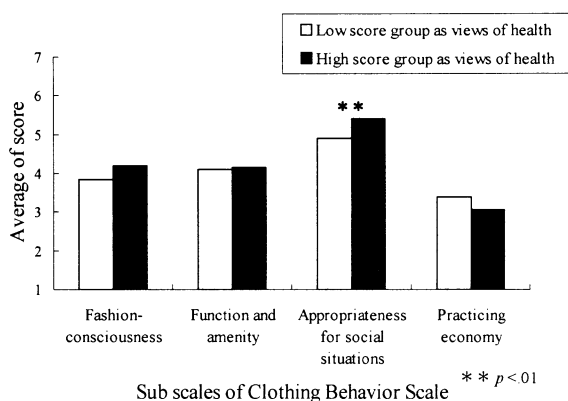


Fig.2 Comparison of clothing behavior between low score group and high score group as views of health

次に健康観の下位尺度「他人との調和」では、同様に「適切性」因子において高群（ $n=64$ ）が 5.4、低群（ $n=62$ ）が 4.9 であり、有意差が見られた（ $t(117.355)=-3.382, p<.01$ ）。下位尺度「個人的・社会的な予防」でも、同様に「適切性」因子において高群（ $n=64$ ）が 5.4、低群（ $n=62$ ）が 5.0 であり、有意差が見られた（ $t(119.647)=-2.688, p<.01$ ）。下位尺度「健康の諸価値と心身の機能」では、「機能性」因子において高群（ $n=68$ ）が 4.0 であるのに対して低群（ $n=58$ ）が 4.3 であり、有意差が見られた（ $t(124)=-2.069, p<.05$ ）。「適切性」因子においては高群（ $n=68$ ）が 5.3、低群（ $n=58$ ）が 4.9 であり、有意差が見られた（ $t(124)=-2.676, p<.01$ ）。下位尺度「健康維持の心構え」では、「適切性」因子において高群（ $n=68$ ）が 5.3、低群（ $n=58$ ）が 5.0 であり、有意差が見られた（ $t(124)=-2.187, p<.05$ ）。下位尺度「健康

の基盤としての環境」では、いずれの因子においても有意差は見られなかった。

健康観全体および5下位尺度のうち4下位尺度で、健康を幅広く多様にとらえている者は社会における被服の適切性を重視していることが明らかになった。

考察であるが、健康観の尺度値が高い、すなわち健康を幅広く多様にとらえている者は、被服行動の「適切性」因子においてそうでない者より得点が高く、被服の社会的な適切さを重視しているにとらえることができる。さらに健康観の5下位尺度のうち、「他人との調和」「個人的・社会的な予防」「健康の諸価値と心身の機能」「健康維持の心構え」の4下位尺度で同様の差が見られた。これは社会への関心や、見られる存在としての自己を自覚して他人との適度な距離や適切な人間関係を築こうとする傾向を示すのではないかと考えられる。健康の社会的側面の一つとして人間関係があるが、「他人との調和」は他者との関係と心理的な健康、特に充実感や情緒の豊かさ、意欲などを示すものであり、精神的健康において対人関係を重視していることを示すものではないかと考えられる。

また「健康の諸価値と心身の機能」では「機能性」因子においても有意差が見られたが低群のほうが高群よりも得点が高く、健康に関する価値をどちらかという認めない者のほうが、衣服のデザイン等より機能性を重視していると考えられた。つまり逆に考えれば、健康に関する価値を積極的に認める者は、機能性に関しては中間の位置にいる（「どちらともいえない」が4であり、平均得点は4.0）にとらえることができる。健康に関心がある者のほうが一見、衣服の機能性に敏感であると考えられるが、衣服の機能性は身体的な健康の側面（快適性など）から当然のこととしてとらえていて、その上で情動の活性化やひいては精神的健康につながるようなデザイン等を考慮しているのではないかと考えられる。

### 3-4 被服行動に関連する諸要因

被服への関心の程度（5段階の評定尺度）については、全体の平均値が4.1であったことから、1（弱い）から3（中間）に回答した者を低群（ $n=31$ ）、4と5（強い）を高群（ $n=95$ ）として被服行動の各因子ごとに  $t$  検定によって比較した。その結果、流行性では高群のほうが有意に高く（ $p<.001$ ）、機能性では低群のほうが有意に高く（ $p<.05$ ）、適切性では有意差がなく、経済性では

低群のほうが有意に高かった ( $p<.01$ ).

これは1項目のみの質問であるため「被服(化粧やヘアメイク, 装飾を含む)への関心」の解釈が一様ではなかった可能性もあるが, 高群では流行性が高く, 低群では機能性・経済性が高かったということは, この「被服への関心」は被服の流行への関心と解釈されたと考えられる. 逆に流行に関心がない者は, 衣服の機能性や経済性に関心があると考えられる.

被服選択時の色選択の基準として嗜好色を選ぶか自身に似合う色を選ぶか(いずれかを選択させる2件法)では, 嗜好色選択群( $n=47$ )と似合う色選択群( $n=73$ )に分け, 被服行動の各因子ごとに  $t$  検定によって比較した. その結果, 流行性では似合う色選択群のほうが有意に高く ( $p<.05$ ), 機能性でも似合う色選択群のほうが有意に高く ( $p<.05$ ), 適切性では有意差はなく, 経済性では嗜好色選択群のほうが高かった ( $p<.05$ ). したがって, 似合う色を選択する者は流行性や機能性を重視し, 好きな色を選択する者は経済性を重視するという事になった.

被服選択時の決定要因としてデザインや色を優先するのか着心地や機能性を優先するのか(いずれかを選択させる2件法)では, デザイン・色優先群( $n=91$ )と着心地・機能性優先群( $n=31$ )に分け, 被服行動の各因子を  $t$  検定によって比較した. その結果, 流行性ではデザイン・色優先群が有意傾向にあり ( $p<.10$ ), 機能性では当然であるが着心地・機能性優先群が高く ( $p<.001$ ), 適切性では有意差がなく, 経済性でも有意差がなかった.

被服選択時に気に入った服に自分の体型を合わせようとするのか自分の体型に合う服を選ぶのか(いずれかを選択させる2件法)では, 衣服基準群( $n=30$ )と体型基準群( $n=90$ )に分け, 被服行動の各因子を  $t$  検定によって比較した. その結果, 経済性においてのみ体型基準群が有意に高かった ( $p<.05$ ). したがって,気に入った服ではなく体型に合う服を選択する者は経済性を重視しており, 衣服選択時に体型と価格という実際のな面を重視していると考えられる。

## 4. 総合的考察

### 4-1 本研究の結果から

女子大学生の健康観と被服行動の関連を検討した結果, 第1の目的である専攻別の健康観と被服行動の比較では専攻によって違いが見られ, 専攻

を志望する個人的背景と各専攻の教育的な環境が影響していると考えられた. 第2の目的である健康観と被服行動との関連では, 健康を幅広く多様にとらえている者は被服行動のうち社会場面における適切性を重視し, 被服行動によって自分自身の健康の心理的側面や社会的側面(人間関係など)を調節している可能性が示唆された.

健康観とは健康に関する価値観という解釈をすることもでき, その意味では服装観も価値観と関連する. 特に, 本研究で考察してきたような健康の社会的側面と被服の社会的側面には, 社会的な場面つまり人間関係における望ましさとそれを実行することによって得られる安心感や積極性(すなわち精神的健康)という共通点があると考えられる. 逆の場合には実行しないことによる緊張感や消極性が生じられると思われるが, 被服に関しては社会的望ましさよりも自己主張や自己防衛といった個人内要因を優先して自己の安定を図ることがあり得るであろう.

### 4-2 被服と健康との関連

箱井・柏尾(2010)<sup>7)</sup>は健康維持・増進に関わる服育プログラムについて言及している. 本研究は若年女性を対象としたが, 高齢者を対象とするADL(日常生活動作能力)の調査項目には, 社会的役割に関連して社会への関心を問う項目がある<sup>13)</sup>. この項目は直接被服に言及しているわけではないが, 女性に対してはもちろん, 男性に対しても整容や身だしなみとすれば受け入れられやすく, 自己概念, 社会への関心, そして健康に関する指標ともなる可能性がある.

このように, 流行(被服)への関心は適度であれば社会への関心や見られる存在としての健全な自己意識の表れと考えられ, 服育プログラムの可能性もその点にあると考えられる. ただ特に若年女性において流行(被服)への過度の関心は, 例えば過剰な自己防衛や消費による依存といった何らかの心理的な問題を示す場合もあると考えられ, 被服への関心はプラス面だけではないかもしれないことに留意する必要があると思われる.

### 4-3 本研究の限界と課題

本研究の対象者は人数も限られており, 一大学の女子学生のみである. ただ被服への男子の関心が近年高まっていると言われているとはいえ, 関心の度合や行動は性別によって異なるのが普通であり, したがって分析自体は男女別に行うのが現段階では妥当と考えられる.

また, 被服行動に関連するであろう他の要因を

含めた個人の背景, 例えば服装観や被服関心度は本調査では明らかになっておらず, 被服行動に直接関連する要因もさらに検討していく必要がある.

#### 引用文献

- 1) Kaiser, *The social psychology of clothing and personal adornment*. New York: Macmillan Publishing Company. (1985)
- 2) 神山進, 織消誌, **39**, 678-682 (1998)
- 3) 尾田貴子, 橋本幸子, 柏尾眞津子, 土肥伊都子, 織消誌, **44**, 700-709 (2003)
- 4) 上野裕子, 箱井英寿, 小林恵子, 織消誌, **42**, 760-765 (2001)
- 5) 山岸裕美子, 明治生命厚生事業団第5回健康文化研究助成論文集, 116-124 (1999)
- 6) 泉加代子, 織機誌, **55**, 141-148 (2002)
- 7) 箱井英寿, 柏尾眞津子, 織消誌, **51**, 143-147 (2010)
- 8) 神山進, 織消誌, **44**, 635-636 (2003)
- 9) 杉田秀二郎, 健康観に関する心理学的研究, 日本大学大学院文学研究科学位論文 (1999)
- 10) 箱井英寿, 織消誌, **42**, 784-792 (2001)
- 11) 水村 (久埜) 真由美, 橋本万記子, お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報, **5**, 89-98 (2002)
- 12) 永野光朗, 織消誌, **35**, 468-473 (1994)
- 13) 古谷野亘, 柴田博, 中里克治, 芳賀博, 須山靖男, 公衛誌, **34**, 109-114 (1987)